
Punica granatum

鷹槻れん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

P u n i c a g r a n a t u m

【Nコード】

N 1 1 7 8 I

【作者名】

鷹槻れん

【あらすじ】

吸血鬼のブレイズと、人間のパティス。異種族であるブレイズに近付きたいと願うパティスと、そうなって欲しいと思いつながらもそれを望み切れないブレイズの葛藤（月夜の約束読みきり番外）。

初夏の頃、庭の片隅に赤く色付く花を見つけ、パティスは思わず目を瞠った。周りは濃い緑の葉ばかりで、こんな風に鮮紅色をまとった木は他になかったから。

「綺麗……」

木自体の背丈は三メートルと言ったところ。身長が一六〇センチに僅か足りないパティスが真下に立つと、てっぺんが見えなくなる。それでも花自体が枝の先端に付いているので、それほど首を上向けなくても可憐な様を臨むことが出来た。

その花は六枚の花弁の中心に沢山のおしべを持っていた。花びらの赤と、花粉の黄色が、濃い緑の葉を背景に一層引き立って見える。「何の花かしら？」

木陰に入っていればそれほど暑くはないけれど、見上げた空の色は確実に夏の気配を漂わせ始めている。

真つ青な空に薄く伸びる白い雲と、思わず目を細めずにはもられない白銀の陽光。

傍らに大好きなブレイズがいてくれたら最高のシチュエーションだけど、吸血鬼である彼に、それは酷な話だ。

（夜になったらブレイズと一緒にもう一度見に来よう）

太陽の下で輝かんばかりに咲き誇るこの花も素敵だけれど、きつと淡い月光の下で見上げるそれも昼間に引けを取らないはずだ。隣にブレイズがいてくれればそれは尚更。

一人夜に思いを馳せ、口元に微笑を浮かべると、パティスは庭を後にした。

夜になるのが待ち遠しいのはいつものことだけれど、こんな風にブレイズの寝室——地下入口——前で彼の登場を待つのは本当に久々だった。

「……何事だ？」

常ではないパティスの出迎えに、ブレイズが驚いた顔をする。

「今夜は一緒に行きたいところがあって待ってたの」

本当は、自分が気付かないうちにブレイズがどこかへ行ってしまったら、と思うと不安だったのでこうして待ち伏せしていたのだけれど、それは言わずにおいた。ついでにいつもは傍を離れない愛犬——本当は使い魔だけれど——ナスターを、今日は連れてこなかったことも。

「行きたいところ？」

ブレイズと違って基本的に昼間活動していることの多いパティスは、彼が起きてどこかへ行く素振りを見せるとそれを見届けてからベッドに入ることが多い。それを思ったのか、ブレイズが少し思案げな顔をしてパティスを見た。

「お前、今日はちゃんと昼寝したのか？」

夜、ブレイズと出歩くということはパティスが睡眠時間を削っていることに他ならない。そんなことをすればパティスが体調を崩すことは目に見えているから……ブレイズは彼女が自分に付き合って眠らないことを酷く嫌う。

「もちろんよ」

そのことを経験上知っているパティスは、彼の探るような鋭い眼差しを真っ向から受け止めてにこやかに微笑んだ。

「それならいいが……」

パティスの笑顔を見て、ブレイズがふと視線を逸らす。その頬に朱が差しているように見えたのは燭台に灯る炎の加減だろうか？

パティスが傍らにナスターを連れていないときは、今夜みたく二

人きりで恋人のような時間を過ごしたいと感じているということを、恐らく大人なブレイズは分かってくれているんだろう。初めて誘ったときは「ナスターは？」と聞いてきた彼が、二度目以降、一切そんな野暮なことを聞かなくなったことでそれが分かる。

と、同時にこんな具合にパティスが彼を誘うと、最近はずいといつていいほどこういう態度を示すようになったのだ。

（照れてくれてるんだとしたら嬉しいな）

そんなことを考えて口の端に微かな笑みを浮かべると、パティスはブレイズの手を引いて庭へと導いた。

「あれよ」

いつものようにパティスが歩きやすいように、とブレイズが灯してくれた炎と共に歩みながら、パティスは逸る気持ちを抑えてブレイズの手を引き庭を縦断した。そうしてしばらく歩いてから、昼間見つけた木を視認できる距離まで来ると待ちきれなくて前方を指差した。

今夜は運良く月がとても明るい晩だった。それで、パティスの目にも少し離れた場所に息づく赤い花が見て取れたのだ。

「ああ、柘榴か」

その花を見た途端、ブレイズがふっと表情を和らげてパティスには分からなかった木の名を告げる。

「ざくろ？」

耳慣れないその名に、パティスがきよとした顔をしたら

「夏の終わりごろになれば甘い実が食えるぞ」

すぐさまブレイズが嬉しい言葉をくれた。

「本当！？」

「ああ」

その返事に一人はしゃぐパティスの横で、ブレイズが手入れを怠っていたことをしきりに後悔する言葉を漏らす。

「手入れ、してなかったの？」

その台詞に、パティスはとても意外な心地になった。だって目の前の柘榴の木は、こんな綺麗な花を咲かせているのに……。

「背が伸びすぎだろ？」

言われてみれば三メートルというのは高木と言えないこともない。でも、それって手入れしてないことになるのかしら？ そんな風に思ってブレイズを見詰めると、

「館に戻ったらディックに聞いてみるといい」

ブレイズが母から受け継いだ——今は使い魔として自由に館を飛び回っている——辞書を引け、と示唆してニヤリと笑うブレイズ。

そんな彼の表情を見て、これ以上聞いても答えは得られないと悟ったパティスは、

「了解」

わざとらしく敬礼すると、次の瞬間にはそれを払拭するようにブレイズの腕に強くしがみ付いていた。そうしてそのまま彼を木の方へと誘う。^{いざな}

辞書を調べるのは明日でいい。

今夜は月夜の中で幻想的に咲き誇るこの綺麗な花を、ブレイズと共に満喫したかった。

- 3 -

昨夜は結局夜中過ぎまでブレイズと共に木の傍で話し込んでしまった。

それで、さすがにいつも通りの時間にお目覚めというわけにはいかなくて、パティスは昼過ぎまでベッドの住人と化したのだ。

「やだ、くすぐりたい……」

一晩この部屋に閉じ込めていたことを腹立たしく思っているのか、そんなパティスの頬を、ナスターがペロペロと舐める。その感触に、さすがのパティスもおいそれと眠っていられなくなった。

いつもなら自分が目覚めるまで大人しくしていてくれるのに、報復のつもりかしら？ そんなことを思いながらベッドサイドのナスターを軽く睨んだら、ヘロツと舌を垂らした愛犬と目が合った。その抜け顔に毒気を抜かれて、パティスは苦笑交じりにベッドから抜け出す。

「おはよう、ナスター」

頭を撫でながら少し時間帯のずれた挨拶をして、ふと思いついたように「昨夜はごめんね」と付け加える。そんなパティスに、ナスターが「気にしてませんよ？」とでも言うように尻尾を振って応えてくれた。

「さて、今日は……」

ディックに柵榴きんろうのことを教えてもらわなくてはいけない――。

「ディック？」

いつもなら書庫のなかを飛び回っているはずのディックが、今日に限って見当たらない。

ディックは気まぐれな本――百科事典――なので、こんな風に目測をつけたところに居てくれなかったりすると、探すのに結構苦労する。

（そういえば……小さい頃に散々からかわれたっけ）

パティスがこの館を初めて訪れたのは彼女が十二歳のとき。

ブレイズに伴われて部屋の扉を開けたと同時に自らのページを羽のようにバタつかせながら――ある意味鳥のように――宙を舞うディックに弄ばれたのを思い出す。「ディクシヨナリーのディックだ」と紹介されたそれを見て、本当に驚いたのをつい先日のことのように思い出せる。何しろ、本が生き物みたいに空を飛んでいたのだから。

でも、今ではそんな光景も当たり前になってしまった。

ふとそこまで考えて足元に視線を落とすと、パティスは我知らず微笑んだ。そう。ついでに言えば、今横を歩いているナスターだっ

て、元はただの折り紙だった。パティスが折って、ブレイズが命を吹き込んだ使い魔――。

分かっているけれど、さすがに付き合いが長過ぎて……パティスは時々そのことを失念してしまう。

「ナスター、ディックの居場所、分らない？」

問えば「任せとけ！」とばかりに一声ワン！と吠えてナスターがパティスの前に出た。こんなところもナスターをただの紙切れだと思えなくなる理由のひとつだ。

しばらく得意げに鼻を鳴らしていたナスターに導かれて、パティスはやっとディックを見つけることが出来た。

「ディック……」

まるで普通の本みたく本棚の一角に納まった――要するに当初の思い通り書庫にいた――彼（？）を見つけたときには思わず溜め息が漏れた。

「やっぱり意地悪してるの？」

いつもは頼まなくてもそこら中を飛び回っているくせに、いざパティスが探そうとすると至極まともな本になり切るなんてあんまりだ。

いつもこんな風にパティスをからかうような素振りを見せることが多いディックに、何となく腹が立った。

ここで逃げられては元も子もないと素早く手を伸ばせば、まるでそれを待っていたかのようにディックが宙へ飛び出す。

「あ、待って！ 柘榴のことを教えて欲しいの！」

思わず眉根を寄せて叫べば何となく「あっかんべ」をされたような気がした。

でも、そんなことで諦めるパティスではない。走ったりジャンプしたりしながら懸命にディックを追う。その後ろをナスターが面白そうについてくる。そんな追いかっこを十五分くらいしたころ、ディックが観念したようにパティスの腕の中にすとんと落ちてきた。

「ご丁寧に、柘榴の載ったページをちゃんと開いて――。」

- 4 -

「ねえ、ブレイズ！ 凄いのよ――！」

ある満月の晩。

いつかのようにブレイズの寝室――地下室――出入口前で部屋の主を待ち伏せしていたパティスは、彼が姿を現すと同時にそう叫んでいた。

「まったく、何事だ、騒々し……――」

ある意味寝起きを襲撃されたような形になったブレイズは、不機嫌さを隠さない声音でそこまで告げると、次の瞬間勢い込んで近付いてきたパティスを見て凍りついたように動きを止めた。

「……パティス、お前、鏡……」

たっぷり数呼吸分の間を空けてから何とかそう告げたブレイズに、パティスがきよとした顔をする。

本人は気付いていないようだが、ドレスの至るところを朱に染めたパティスの姿はまるでスプラッタ映画のワンシーンのようだ。でも、場に漂うにおいからそれが血ではないことにいち早く気付いていたブレイズは、そのお陰で無駄に動揺しないで済んだ。

しかし、血ではないにせよ、彼女の今の格好は余りにも酷かった。

（一体何を――？）

そこまで考えてからふとあることに思い至ると、途端脱力したように吐息が漏れた。

「あのね、柘榴^{ざくろ}の実が……」

言われなくても分かった。

パティスはここへ来る前、その実を食べたんだろう。

よく見れば、服のみでは留まらず、両の手や口の周りもそこはかとなく赤く染めているパティス。

「喰うのは構わねえが、もうちつとおしとやかに喰えよ……」

分かってしまえばただただ苦笑のブレイズである。「えっ？　うそ！」と言いなから自らの姿を見回して慌てるパティスを見て、思わず笑みが浮かんだ。

「で、何が凄いつて？」

自らの汚れを追ってクルクルと回るパティスを見詰めながらそう問えば、ハツとしたようにパティスが動きを止めた。

「あのね、私、柰榴の実が美味しいって思えたの！」

まるで宝物を見つけた子供のように嬉しそうに微笑ったパティスを見て、ブレイズは困惑する。

（そののどこが凄いんだ？）

ふとそこまで考えて、あることに思い至ったブレイズは、それでもそんなことはないだろう、と頭から浮かんだばかりの考えを追い払った。でも、一度閃いてしまった思考はそう簡単に消せるものではなくて――。

そうなると思えないことにそこら中を赤く汚したままのパティスが、それ故に余計に愛しく思えてしまうから不思議だ。

「ディックがね、教えてくれたの。柰榴の実って血の味がするんでしょう？　その実が美味しいって思えたんですもの。私、ブレイズが好きな味、共感出来たってことよね？　そう考えたらね、何だか嬉しくつ……、――！？」

皆まで言われなくとも彼女が言わんとしていることが、今自分が思ったことと同じだと悟ったブレイズは、パティスが言い終えない内に思わず彼女を抱きしめていた。

実際のところ、柰榴の実の味と血の味とは全く違うものだと言えは思う。だから実を美味だと感じたところで、血もそうだと思えるか？と聞かれたら恐らくは否なのだ。

でも、そんなことは関係ないと思えてしまうほど、自分に歩み寄ろうと必死になってくれたパティスの気持ちが嬉しかった。

常日頃、極力彼女に触れないように気を付けていたことも吹き飛

んでしまっくらいに――。

ブレイズの腕の中で、パティスが困惑したように彼の名を呼んでいたけれど、今だけは聞こえない振りをしようと思った。

そうしながら、ブレイズはパティスに自分と同じところまで落ちてきて欲しいと願う自分と、それだけはしたくないと願う自分とが拮抗するのを感じていた。

終わり

（後書き）

当初予定していたラストと若干ズレてしまったかも？という気もするんですが、根本的には変わっていないからいいかな？と思ったり
…（^^）；

ブレイズに近付きたいと願うパティスと、そうなって欲しいと思いながらもそう望み切れないブレイズとの葛藤を描きたかったお話だったりします。

お粗末さまでした（><）。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1178i/>

Punica granatum

2010年10月8日14時29分発行